

## 教育実習指導の効果に関する研究 (Ⅱ)

— 附属東雲小学校および同東雲中学校における実習生の意識変容に基づく検討 —

神原 一之 秋山 哲 川口 浩 松前 良昌  
林 孝 林 武広

### 1. まえがき

教育実習（以下、実習）の充実化は、様々な検討とその結果に基づいた試みがなされてきた。広島大学をはじめ国立の教員養成系大学・学部では実習が附属校で実施されていることから、各大学・学部で実習の充実化に向け、附属校と大学との連携により大学のカリキュラムや実習内容の改善等の取り組みが続けられている。

実習生が附属学校における実践的な教育経験を通して、教員としての実践的資質・能力を培い、教職への意欲を高揚する場としての実習の重要性は言うまでもないが、その目標達成に対し、期間の長さ、実習生の担当数等が必ずしも十分でないとの指摘もなされている。実習の期間、設定時期など、いわゆるハード面は大学のカリキュラムや附属校の教育課程・学校行事等との関係があるため、変更や修正は必ずしも容易ではない。

そこで筆者らは実習の充実化のため、このようハード面の変更ではなく、実習担当校でなされる実習生への指導内容や活動など、いわばソフト面の検討と工夫が必然と考え、昨年度から本格的な研究を開始した。本年度は昨年度の成果に基き、実習指導に関する検討を行ったので報告する。

### 2. 昨年の研究における問題点と本研究の焦点

筆者らは附属校園における実際の実習現場において、具体的にどのような指導や助言が実習生にとって有効であるのかを検証し、その結果を指導に活かすことも必要と考え、昨年度に附属東雲小学校（以下、東雲小）、同東雲中学校（以下、東雲中を調査フィールドとして研究した成果を報告した（林ほか、2011）。研究プロセスとして、実習生への事前と事後アンケートの反応比較から実習による意識変容や目標達成程度と

実習指導との関係性に基づき意義や効果の検討を行ったものである。その研究では両校の実習生全体をそれぞれ調査単位として扱い、教科、配属学級等の属性の違いは考慮せずに調査・分析を行った結果を報告した。その理由として両校教員それぞれ共有する全般的な指導指針や重点項目に対する指導評価の意義を重視したためである。調査では実習で実践する20程度の内容項目（後述）に対して自信の有無を事前と事後にそれぞれ3項目選択、さらに事後では、実習指導のインパクトと目標達成程度を尋ねている。

その研究では、上記のように内容項目それぞれについて自信の有無を尋ねていないため、回答にあいまいさがあり、事前－事後の意識変容の詳細、実習指導との関連について概略は把握できたが、十分な解析が行えなかったことが問題としてあげられる。

そこで本研究では、林（2011）と同じ研究プロセスを踏襲しつつも、教員として資質や実践に関する内容について事前事後で同じ項目を設け、それぞれについて自信の有無を尋ねることで、実習生のより詳細な意識変容を明らかにすること、および、実習指導内容と教職への意欲高揚（後述）との関連を明らかにする。

### 3. 東雲小および東雲中の実習指導の目標

#### A. 東雲中

東雲中の実習は広島大学教育学部ほか（2011）による中・高等学校実習の手引きに述べられている目的達成に向け、学校としての具体的目標として“教師を目指す意志が強固になること”を全教員が共有し、次に挙げる項目が達成できるよう指導に当たっている。

- ①社会人としての自覚を持ち、勤務のルールを確実に遵守するよう努めること。
- ②自らの立ち振る舞い、態度など全てが教育であることを自覚すること。

---

Kazuyuki Kambara, Satoshi Akiyama, Hiroshi Kawaguchi, Yoshimasa Matsumae, Takashi Hayashi and Takehiro Hayashi: A study on the effect of teachers' guidance for student teachers at Shinonome Elementary & Jr. High schools, based on statistical analysis of pre- & post-questionnaires (II).

- ③授業のみならず学校生活全体を通して生徒との関わりをできるだけ多く持つこと。
- ④授業作りでは、初めから指導教員に尋ねるのではなく、まず自分自身がしっかり考えることを前提とし、必要に応じて指導教員のアドバイスを請うこと。
- ⑤授業実践後の振り返りを大切にすること。
- ⑥指導内容の確実な理解を図ること。

実習期間は2週間ではあるが、各教科教員はできる限り授業実践の機会を多く設け、かつ、個々の実習生の状況に応じた指導を心がけている。また、学級活動、学校行事、クラブ活動指導、特別支援学級参観も教師としての総合的な資質向上を図るうえで不可欠な活動として参加を義務づけている。

## B. 東雲小

東雲小の実習は教育学部初等教育教員コースおよび特別支援教育教員養成コースの学生が中心であり、加えて、教育学部第2類～5類所属で副免として小学校免許取得を目指す学生も参加している。実習は広島大学教育学部ほか（2011）による小学校実習の手引きに述べられている目的の達成に向け、学校としての具体的目標として“将来の小学校教師としての自信と自覚が一層確固となる”ことを全教員が共有し、次に挙げる項目を重点的に促しながら指導に当たることとしている。

- ①社会人としての自覚を持ち、勤務のルールを確実に遵守するよう努めること
- ②自らの立ち振る舞い、態度など全てが教育であることを自覚すること
- ③授業のみならず学校生活全体を通して児童との関わりをできるだけ多くし、児童理解、児童との接し方などを習得すること
- ④授業作りでは、初めから指導教員に尋ねるのではなく、まず自分自身がしっかり考えることを前提とし、必要に応じて指導教員のアドバイスを請うこと
- ⑤授業実践後の振り返りを大切にすること
- ⑥授業の方法のみに偏らず、系統性に留意しつつ指導内容の確実な理解を図ること

本実習の期間は初等教育教員養成コースが5週間、特別支援教育教員養成コース基礎免3週間、教育学部2類～5類では3週間である。実習の違いにかかわらず、上述の諸点に留意しつつ指導に当たっている。なお、実習生のクラス配当、授業担当の教科とその内容は、6月の時点であらかじめ決めており、教材研究などは本校の実習前に各自で準備することになっているため、授業実践は、あらかじめ計画されている日程に

沿って進めている。授業実践では実際に児童の前に立って本格的に指導を行うことになるので、仮説的に立案した指導案の実践的検証の場でもある。

## 4. 調査方法

調査は東雲中、東雲小両校の全実習生に対して実習の事前、事後にアンケートを実施した。事前アンケートは、実習開始日に、事後アンケートは実習終了日にそれぞれ実施している。実習生には各自にオリジナルのシンボルマークを決めてアンケートに記入させ、回収後に事前、事後でペアとして対応できるようにしている。この方法では氏名を用いることによるバイアスを軽減し、回答の確度を上げることをねらいとしている。

### アンケートの内容

事前アンケートの質問内容は教師として必要な資質・能力であり、実習で高めることが必要と考えた22項目（表1）からなる。実習生にとって昨年のもとのほぼ同一とである。それぞれについて“自信”の程度を5件法で回答とし、一部（1項目のみ）自由記述を設けた。その他、実習回数、主免・副免など実習生の属性に関する選択項目も設けた。

事後アンケートでは、事後で尋ねた22項目それぞれについて実習を通じた変化を見取るために事前と同じ項目の“自信”の獲得程度を5件法で回答させた。加えて実習指導のインパクトを見取るために、具体的な指導項目9項目を設け、4件法（一部自由記述1項目含む）で回答させた。さらに実習に対する実習生個人の目標の達成感の程度と両校の実習指導における最終的な目標でもある“教職への意欲の高まり”の程度項目を設け、それぞれ4件法で回答させた。具体的な質問は表2に示す。

## 5. 解析結果と考察

### A. 東雲中（中・高校実習）の場合

教師として必要な資質・能力・技能であり、かつ実習で高めることに関する22項目の事前アンケートおよび事後アンケート集計結果を表1に示す。

事前で自信が無いことでは、「問題行動を起こす子どもへの指導」、「自分の指導でつまずいた子どもをどう支援するか」および「参観日などで保護者にどう接するか」が突出して高い。一方、昨年度の研究で自信がない項目として挙げた「教科内容の理解・技能」、「授業の企画」、「授業での発問」、「授業での子どもの意見の取り上げ方」は高いとは言えない。自信があることとしては、昨年度と同じく「着実な勤務」、「他の実習生とどう接するか」が突出して高く、次いで「指導案をどう書くか」、「子どもとのコミュニケーション

表1 東雲中学校実習生の自信に関する事前、事後アンケート集計結果

東雲中学校実習	実習前 自信の程度(%)					N	実習後 自信の獲得(%)					N
	ない	あまりない	どちらとも いえない	まあまああ る	ある		無くなった	やや無く なった	どちらとも 言えない	まあまあつ いた	ついた	
教科内容の知識・理解	3.5	32.7	42.5	21.2	0.0	113	7.0	13.2	28.1	48.2	3.5	114
教科の実習、実験、実技などの技能	9.6	43.0	36.8	10.5	0.0	114	3.5	9.6	28.9	54.4	3.5	114
子どもとのコミュニケーション・会話	0.0	20.2	31.6	39.5	8.8	114	0.9	10.5	21.9	60.5	6.1	114
授業の構想づくり	6.2	27.4	43.4	22.1	0.9	113	0.9	4.4	25.4	59.6	9.6	114
子どもの考えの把握	7.9	50.9	30.7	9.6	0.9	114	1.8	14.0	46.5	35.1	2.6	114
指導案をどう書くか	4.4	23.7	34.2	36.0	1.8	114	0.9	4.4	18.4	63.2	13.2	114
教材・教具をどう使うか	4.4	24.8	45.1	23.0	1.8	113	1.8	1.8	40.4	48.2	7.0	114
授業での発問	7.1	43.4	36.3	13.3	0.0	113	3.5	12.4	42.5	39.8	1.8	113
板書の仕方	11.4	34.2	33.3	19.3	1.8	114	1.8	11.4	42.1	40.4	4.4	114
授業での子どもの意見の取り上げ方	9.7	30.1	38.1	22.1	0.0	113	0.9	17.5	45.6	34.2	1.8	114
自分の指導でつまづいた子どもをどう支援するか	14.9	52.6	24.6	7.9	0.0	114	1.8	16.7	63.2	17.5	0.9	114
実際の授業での臨機応変な対応	13.3	41.6	24.8	18.6	1.8	113	1.8	20.2	39.5	34.2	4.4	114
プリント・ワークシート等の資料作成	3.5	21.1	36.0	30.7	8.8	114	0.9	7.0	36.0	45.6	10.5	114
子どもをどう注意するか・叱るか	18.4	43.0	21.1	17.5	0.0	114	1.8	23.9	48.7	23.9	1.8	113
問題行動を起こす子どもへの指導	24.6	52.6	17.5	5.3	0.0	114	5.3	19.3	62.3	12.3	0.9	114
授業の反省・評価をどう活かすか	1.8	8.8	33.3	49.1	7.0	114	0.0	7.0	16.7	63.2	13.2	114
他の教育実習生にどう接するか	0.0	5.3	19.3	55.3	20.2	114	0.9	4.4	19.3	57.9	17.5	114
参観日などで保護者にどう接するか	22.8	40.4	20.2	14.0	2.6	114	3.5	9.7	83.2	3.5	0.0	113
実習指導の教員にどう接するか	0.0	14.9	32.5	49.1	3.5	114	0.0	1.8	29.8	59.6	8.8	114
着実な勤務	0.0	3.5	18.4	47.4	30.7	114	0.0	2.6	7.0	52.6	37.7	114
クラブや委員会活動等の指導	7.0	27.2	32.5	31.6	1.8	114	1.8	8.0	66.4	20.4	3.5	113

ン・会話」が高い。このことから実習生間で協調しつつ着実な出席への自信はあるが、トラブルに類することへの対応、保護者と接することへの自信の無さが見て取れる。これらに対して具体的なイメージが無く、漠然とした不安の反映と考えられる。教科内容の理解・技能、指導案、子どもとのコミュニケーション等、授業づくりの基本となることには、一定程度の自信を有していることがうかがえる。

事後で自信がついたことでは、「着実な勤務」が突出して高い。次いで「授業の反省・評価をどう活かすか」と「指導案をどう書くか」「授業の構想づくり」で高く、実習を通し授業を作っていくことへ自信が高まったことがうかがえる。

事前-事後の変容では、全項目について事前-事後をペアとしてWilcoxonの順位検定を行った結果、「着実な勤務」以外の全項目で有意に高まっている（有意確率(両側)<0.05）ことが判明し、実習を通し、殆ど全

ての項目で程度の差はあれ、自信を得た、あるいは自信が一層高まったことが明らかとなった。

実習指導内容への有効感、全項目で高い有効感を示しており、特に「授業評価」が突出して高い（表2）ことが特徴的である。

自己目標達成感の回答分布（N=114）は「全くできなかった」1.9%、「あまりできなかった」24.1%、「まあまあできた」63%、「できた」11.1%で肯定的回答が7割以上である。また、教職への意欲高揚の回答分布（N=114）は、「あまり高まらなかった」10.5%、「かなり高まった」56.1%、「非常に高まった」33.3%であり、肯定的回答が9割であった。

そこで教職への意欲高揚の回答分布と上記の実習指導内容各項目の回答分布との関連をみるためFisherの直接法で検定を行った結果、「授業の構想・企画」（N=114, 有意確率(両側)=0.00）、「板書、発問、指示などの指導技術」（N=114, 有意確率(両側)=0.02）、「授業評価」（N=114, 有意確率(両側)=0.03）で有意な関連が明らかとなった。これら授業に直接的に関わることに関する指導が教職に対する意欲高揚にとりわけ有効であったと考えられる。

## B. 東雲小（小学校実習）の場合

東雲中の項で述べた22項目の回答について、まず事前において自信が無いことでは「問題行動を起こす子どもへの指導」、「実際の授業での臨機応変な対応」、「実際の授業での臨機応変な対応」が突出して高い。続いて、「自分の指導でつまづいた子どもをどう支援する

表2 東雲中の実習指導項目への有効感の集計結果

N=114	単位%	役立たな かった	あまり役立 たなかった	かなり有益 であった	非常に有 益であった
授業の構想・企画		0.0	0.9	37.7	61.4
授業する内容そのものへの理解		0.0	0.0	43.0	57.0
指導案作成		0.0	3.5	45.6	50.9
教材・教具の活用		0.0	1.8	57.9	40.4
板書、発問、指示などの指導技術		0.0	1.8	40.4	57.9
授業評価		0.0	0.0	28.9	71.1
児童・生徒理解・把握		0.0	0.9	43.0	56.1
児童・生徒への接し方		0.0	3.5	54.4	42.1

表3 東雲小学校実習生の自信に関する事前、事後アンケート集計結果

東雲小学校実習	実習前 自信の程度(%) N=87 (※=86)					実習後 自信の獲得(%) N=87				
	ない	あまりない	どちらとも いえない	まあまああ る	ある	無くなった	やや無く なった	どちらとも 言えない	まあまあつ いた	ついた
教科内容の知識・理解	5.7	34.5	36.8	20.7	2.3	5.7	6.9	34.5	49.4	3.4
教科の実習、実験、実技などの技能	16.1	51.7	17.2	11.5	3.4	3.4	4.6	34.5	54.0	3.4
子どもとのコミュニケーション・会話	2.3	23.0	25.3	46.0	3.4	0.0	3.4	12.6	51.7	32.2
授業の構想づくり※	8.1	33.7	33.7	23.3	1.2	3.4	3.4	17.2	63.2	12.6
子どもの考えの把握	5.7	46.0	35.6	12.6	0.0	2.3	6.9	40.2	46.0	4.6
指導案をどう書くか	3.4	24.1	39.1	27.6	5.7	1.1	2.3	9.2	60.9	26.4
教材・教具をどう使うか	4.6	35.6	41.4	18.4	0.0	2.3	3.4	26.4	58.6	9.2
授業での発問	16.1	60.9	12.6	9.2	1.1	4.6	18.4	33.3	36.8	6.9
板書の仕方	19.5	42.5	19.5	16.1	2.3	6.9	10.3	35.6	34.5	12.6
授業での子ども意見の取り上げ方	16.1	48.3	23.0	12.6	0.0	4.6	13.8	29.9	47.1	4.6
自分の指導でつまづいた子どもをどう支援するか	17.2	56.3	20.7	4.6	1.1	5.7	13.8	55.2	23.0	2.3
実際の授業での臨機応変な対応	41.4	26.4	18.4	10.3	3.4	4.6	9.2	36.8	37.9	11.5
プリント・ワークシート等の資料作成	3.4	24.1	35.6	29.9	6.9	4.6	1.1	29.9	50.6	13.8
子どもをどう注意するか・叱るか	23.0	42.5	23.0	11.5	0.0	4.6	11.5	24.1	47.1	12.6
問題行動を起こす子どもへの指導	36.8	33.3	23.0	5.7	1.1	2.3	19.5	50.6	25.3	2.3
授業の反省・評価をどう活かすか	8.0	14.9	44.8	29.9	2.3	0.0	8.0	23.0	55.2	13.8
他の教育実習生にどう接するか	2.3	6.9	13.8	62.1	14.9	1.1	3.4	13.8	40.2	41.4
参観日などで保護者にどう接するか	14.9	29.9	35.6	16.1	3.4	1.1	9.2	48.3	31.0	10.3
実習指導の教員にどう接するか	2.3	6.9	40.2	42.5	8.0	0.0	5.7	18.4	52.9	23.0
着実な勤務	2.3	3.4	4.6	43.7	46.0	0.0	0.0	4.6	36.8	58.6
クラブや委員会活動等の指導	3.4	23.0	36.8	29.9	6.9	2.3	5.7	71.3	14.9	5.7

か]、「授業での発問」、「子どもをどう注意するか・叱るか」が高い。一方、自信があることでは「着実な勤務」が圧倒的に高く、続いて「他の教育実習生にどう接するか」、「実習指導の教員にどう接するか」、「子どもとのコミュニケーション・会話」、「プリント・ワークシート等の資料作成」が高い(表3)。これらの傾向は東雲中の場合と類似していることが明らかで、東雲中の項で述べた理由の反映と考えられ、校種に拘わらず実習生に共通すると考えられる。

事後で自信がついたことでは、「着実な勤務」が突出して高い。次いで「子どもとのコミュニケーション・会話」、「指導案をどう書くか」「他の教育実習生にどう接するか」、「授業の構想づくり」が高い。実習を通し子どもと直接向き合ってコミュニケーションを持ちつつ授業を作っていくことへ自信が高まったことがうかがえる。

事前-事後の変容では、全項目について事前-事後をペアとしてWilcoxonの順位検定を行った結果、「クラブや委員会活動等の指導」以外の全項目で有意に高まっている(有意確率(両側)<0.01)ことが判明し、実習を通し、殆ど全ての項目で程度の差はあれ、自信を得た、あるいは自信が一層高まったことが明らかとなった。小学校では中学校のような本格的なクラブ活動が無いことが理由であろう。

実習指導内容への有効感、全項目で高い有効感を

表4 東雲小の実習指導項目への有効感の集計結果

N=87 (※=86) 単位%	役にたつた			
	役立たな かった	あまり役 立たな かった	かなり有 益であ った	非常に 有益 であ った
授業の構想・企画	0.0	0.0	43.7	56.3
授業する内容そのものへの理解	0.0	0.0	58.6	41.4
指導案作成	0.0	1.1	39.1	59.8
教材・教具の活用	0.0	5.7	52.9	41.4
板書、発問、指示などの指導技術	0.0	3.4	37.9	58.6
授業評価※	0.0	5.8	37.2	57.0
児童・生徒理解・把握	0.0	1.1	31.0	67.8
児童・生徒への接し方	0.0	1.1	35.6	63.2

示しており、特に「児童・生徒理解・把握」と「児童・生徒への接し方」が突出して高く(表4)、児童へどう向き合うかに関する指導に高いインパクトがあったことを示し、上述の自信を高めたこととも整合的である。

自己目標達成感の回答分布(N=87)は「全くできなかった」0%、「あまりできなかった」9.2%、「まあまあできた」67.8%、「できた」23.0%で肯定的回答が9割以上である。また、教職への意欲高揚の回答分布(N=87)は、「全く高まらなかった」1.1%、「あまり高まらなかった」10.3%、「かなり高まった」52.9%、「非常に高まった」35.6%であり、肯定的回答が9割であり、東雲中とほとんど同じ分布傾向である。

そこで教職への意欲高揚の回答分布と上記の実習指導内容各項目の回答分布との関連をみるため東雲中の場合と同じくFisherの直接法で検定を行った結果、「授

業の構想・企画」(N=87,有意確率(両側)=0.01),「指導案作成」(N=87,有意確率(両側)=0.01),「板書,発問,指示などの指導技術」(N=87,有意確率(両側)=0.02),で有意な関連が明らかとなった。「児童・生徒への接し方」(N=87,有意確率(両側)=0.06)との関連では有意傾向が認められた。これら授業に直接的に関わることに加え,児童への接し方への指導が教職に対する意欲高揚に有効であったと考えられる。

## 6. あとがき

本報告では配当学年・学級,教科,主免・副免,実習回数などの実習生の属性の違いは考慮せず,学校単位で総括的なアンケート分析を行った結果を報告した。この結果から東雲中,東雲小とも実習指導の目標は概ね達成できたと考えている。

今回の分析を通して,小学校実習,中学校実習で意識変容や指導効果の相違が明白になることも期待したが,実際には似通っていると言っても過言ではない結果であった。異なった点の一つとして,中学校では「授業評価」の指導への有効感が高いが小学校では低いこ

と,小学校では「子どもとの接し方」の指導が出てきたことである。このことは全科を指導することを前提とした小学校では子どもにより注目し,教科を担当する中学校では授業により注目する文化の違いを反映するのかもしれない。

## 引用文献

- 1) 林武広・神原一之・秋山哲・奥野正二・樽谷秀幸・松前良昌・川口浩(2011):教育実習指導の効果に関する研究(Ⅱ)―附属東雲小学校および同東雲中学校における実習生の意識変容に基づく検討―:広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要,第39号,pp.81-86.
- 2) 広島大学教育学部・同附属小学校・同附属東雲小学校・同附属三原小学校(2011):小学校教育実習の手引き(平成23年度版).
- 3) 広島大学教育学部・同附属中・高等学校・同附属東雲中学校・同附属三原中学校・同附属福山中・高等学校(2011):中・高等学校教育実習の手引き(平成23年度版).